

おおさか  
KEY  
ワード  
第7回

# ひらあ、かわらに、 びんごあづち

—— 町名の歌をうたって船場を歩いてみよう

「丸竹夷二押御池…」というは有名な京都の通り名の歌だが、整然たる碁盤目となった大阪の船場にも通りの名を連ねた歌があったことを、船場生まれで、天満宮文化研究所の近江晴子氏に教わった。平仮名で音だけ書きつづてみよう。

はまかじき、いまはうきよに、こうふしど、  
ひらあ、かわらに、びんごあづち、  
ほんこめからも、きゅうたきゅうたに、  
きゅうきゅうほ、ばくろじゅんけい、  
あんどしおまち、はま。

漢字を当てると、冒頭の「はま」は北浜。続けて梶木町(かじき)、今橋(いまは)、浮世小路(うきよ)に高麗橋(こう)、伏見町(ふし)、道修町(ど)、平野町(ひら)、淡路町(あ)、瓦町(かわら)、備後町(びんご)、安土町(あづち)、本町(ほん)、米屋町(こめ)、唐物町(からも)となる。「きゅうたきゅうたに」は北久太郎町と南久太郎町の二つの「きゅうた」ろうまち、「きゅうきゅうほ」も北久宝寺町と南久宝寺町である。博労町(ばくろ)、順慶町(じゅんけい)、安堂寺町(あんど)、塩町(しおまち)と続いて最後の「はま」は長堀川(現在の長堀通り)に面した町になる。大阪弁のイントネーションで読むと自然に旋律が浮かぶ感じであり、旧町名も含むが、現代に復活させたらどうだろう。

もう一つ大阪の道の話である。ニューヨークの東西の通りがストリート(street)、南北の通りをアヴェニュー(avenue)と呼ぶのと同じく、大阪も東西を「通り」、南北を「筋」と呼んだという説がある。確かに本町通りなど東西には「通り」が

浪速書房  
心齋橋通塩町筋西北角  
綿屋喜兵衛坂

本屋・錦屋喜兵衛刊行書の奥付「心齋橋通塩町筋西北角」から心齋橋通りという言い方があったこともわかる。

多く、御堂筋、堺筋、松屋町筋など南北の道路に「筋」が多い。しかし、この説は必ずしも正しくない。上記の船場の町のすべてが、「通り」と呼ばれているわけではなく、道修町何丁目と言えば住所は分かるので道修町通りなど言う必要はない。また、「ミナミ」の繁華街を象徴する八幡筋や三津寺筋など、どちらも東西の「筋」で、御堂筋と心齋橋筋などの南北の「筋」と直交している。以前この付近は豊屋町、笠屋町、玉屋町、千年町などの町であった。これらは一本の道路を挟んだ両側で町を形成し、南北の道に沿って展開していた。住人にすれば、八幡筋や三津寺筋は自分たちの町の脇道だったのである。

こんな資料もある。安政五年(1858)に大坂の書店が出した本の奥付で、店の住所が「心齋橋通塩町筋西北角」になっている。「ストリート・アヴェニュー説」ならば、心齋橋筋塩町通りでなくてはならないのだが、現実には違う例が数多くあったわけである。

歴史の真実は様々で面白い。まちづくりの現場でも昔からの町名に敬意を払い、繊細に計画を進めていく必要があるだろう。さもなくば、まちの表示も混乱して“筋(無理)”がとおって“通り(道理)”がとおらん話になるわけですな…。

※通りと筋の話に興味のある方は、大阪市史料調査会の野高宏之氏「町・通り・筋」(「大阪の歴史」31号、大阪市史編纂所、1990)もご覧ください。